

# 火星



平成17年 8月号

# 七曜抄 二

山尾玉藻

杣の子の耳張つてゐる茅花風

杉山の風に寸得し菊挿し芽

庭下駄が墓のうしろへ廻りけり

梅雨の蝶うたたね橋の辺りより

六波羅の僧連れ出せり鮎の腸  
瀧音に馴れきし眼鏡拭ひけり  
箱庭の夕風どきと思ひをり  
でで虫の睦むと竹の騒ぐなり  
傾ぎつつ湾処へ下りし白日傘  
蝸の鳴く方へ砂利踏みゆけり

# 太白星

柳生千枝子

高漕ぎをしてブランコの風の中  
声出して赤児が笑ふ青葉風  
白百合を剪りて鋏に重さあり  
揚雲雀何処まで空を登る気か  
濡れ色の月出づ春の沖遠く  
ガーベラの花びら乱れそめし紅  
夏鴨の錆び声誰を指弾せる

杉浦典子

蓮浮葉いちまい動く月夜かな  
田水張り夜のこゑひびきやすきかな

虹立ちてフラスコの水沸騰す  
屋上にへりポットあり旱梅雨  
山越えて子を生みにゆく青田かな  
竹皮のけもの臭きを脱ぐ途中  
城跡の一本松の梅雨に入る

浜口高子

鳥の声降る苗障子ずれぬたり  
夕虹や石炉ふたたびくすぶれる  
朝焼や鴉一家に見られをり  
蛸壺の口の整列子供の日  
萩青し越後へ帰る人と居る  
大淀を砂利船のゆく梅雨はじめ  
蓴菜のあらず蓴菜沼の風

# 火星作品 山尾玉藻選

手庇の影 菖蒲田へ落ちにけり 八幡飯塚糸子  
シヤンデリア下の長椅子 明易き  
飛石の影のいろいろ 花菖蒲  
交番へ印捺しにゆく 走り梅雨  
馬小屋の目覚めてをりぬ 露 葎  
夕虹を接骨院の二階より 明石戸栗末廣  
亡骸に冷房すこし 落しけり  
首長き鳥をとほくに 更衣  
空に出て金蠅美しき 麦の秋  
夕焼を引き ずつて行く 墓  
まくなぎや夕仕度らし 水の音 豊中廣畑忠明  
提灯の明り増え 鮎料理  
老いたれば 野のもの 親し 蛇 苺

竹皮を脱ぐに明るき風の筋  
漣の植田明りの夕べかな  
空つぼの部屋に置きある螢籠  
螢火や水の磨きし石のうへ  
酒蔵の音の涼しき木札かな  
息災や一三翁の落し文  
竹籠に十葉かわく美術館  
蝶の昼火鉢の灰のしめりぬし  
麦秋や首を傾げし佛たち  
母の日の太き雨降る真昼かな  
しづかなる鶉籠の辺り梅雨に入る  
銀行の椅子柔らかし更衣  
松蟬や椀の京麩に紅にじみ  
瓜苗の風知るほどに育ちけり  
常薬を口に竹植う日なりけり  
大南風散骨のここと語りをり  
雨あとの三十六峰粽解く

姫路松たかし

大和郡山 城 孝子

八幡吉田島江

# 選のあとに

山尾 玉藻

そう言えば頼朝は「瓜実顔」である。元々この時代は、武士らしい顔と言うものが、未だ定着していなかったようだ。長時間「土用干」すればしぼんでしまいそうな顔でもある。品の良い俳諧味あり。

シャンデリア下の長椅子明易き

飯塚 糸子

日雷安藤忠雄の家四角

大山 文子

シャンデリア下の長椅子」自体に詩は無いが、「明易き」により上質の詩が完成した。人の坐っていない「長椅子」は虚しい存在でしかない。「長椅子」に対し、華やかな「シャンデリア」も効いており、「明易」はここより始まるのである。

亡骸に冷房すこし落しけり

戸栗 末廣

くちなはの衣脱ぐときは濡れてゐし

高松由利子

〈命尽きて葉香さむくはなれけり蛇笏〉の格調高い句があるが、蛇笏の句には死者との別れの覚悟がある。それに対し掲句は死者を死者とする覚悟がまだ無い。悲しみはいずれも同じである。

空つぼの部屋に置きある螢籠

松 たかし

エンゼルフィッシュに鯛みて居りぬ看取り人

金澤 明子

「空つぼの部屋、即ち壁と床だけの部屋である。普段使っている日常品のある部屋でも、螢火に浮かび上がる部屋は、哀れである。まして「空つぼの部屋は無機的でおそろしい。

頼朝の瓜実顔を土用干

山本 輝子

「眺みて居りぬ」が「エンゼルフィッシュ」を水平に見る位置なのである。小さい熱帯魚を美しく見るのは水平に限る。しかしこの句の生命は下五の「看取り人」、眺む姿勢はちよつとした休息を得る姿勢でもある。(以下略)

# 恒星圈

同人 I

大山文子

城門の片蔭にある一輪車  
白南風の猪名に室町呉服町  
結願の高野の道は著莪の道  
ブラウスの女将のくれし団扇なり  
春の堤に押し上げられし車椅子

飯塚 糸子

吉田 康子

南風に腰ひねりぬる竜馬像  
砂壁に軸懸け流す日永かな  
海水の交じる遅日の運河かな  
余花白し織部の盃の重たくて  
船室の花籠ゆるる麦の秋

葉桜の城の口餅買ひにゆく  
耕運機の音のしてゐる梅雨入かな  
夜の墓の出合頭に犬の息  
箱苗の網突き上げし雨催  
杉菜にしづむ苗籠の弁当かな

伊藤多恵子

米澤 光子

逸翁美術師五可  
なりはひのはじまる青嶺背にし  
唐の明の横の肖像(注:上の出版業は二氏のすずめに依る)夏の雲  
蹲をゆつくり使ふ南風に居り  
鴨足草表好みの茶室にて  
逸翁の句碑より出でて蝶の晝

鋤鍬を立掛く壁の揚羽かな  
ま昼間の夫のいびきやばらの咲く  
長廊を鈴音渡るや沙羅の花  
少年の首すぢ白き水中花  
夏雲失せ麒麟の反すう始まりぬ

# 獅子座

山尾玉藻推薦

丸山照子

祭馬一騎ふためく砂けむり  
著莪の花明り御朱印帳に風  
犬の耳吹かれてをりし実梅落つ  
南風に能勢街道の曲りけり

長田曄子

凌霄やスライスさるる脳の影  
逢へぬ人会はぬ人あり花胡桃  
十葉の家裏思ふ家にゐて  
石楠花の坂を一団少年僧

松山直美

バイオリンの音止みてより螢の夜  
夫の手に手を添へ螢覗きけり  
アマリリス新車の夫を迎へけり  
麦畑の光を風のつなぎをり

小林成子

やはらかき表紙を反らす松の芯  
桐の花線路に音の絶えしまま  
滴りの山にはぐれし美術展  
京伏見街道に沿ふ溝浚へ

助口弘子

街の音に咲く神苑の杜若  
石楠花の山へさそはれ肌寒し  
天窓に昨日の守宮雨上り  
薔薇園のランチタイムのオムライス

城尾たか子

万緑に囲まれてゐる船屋形  
百年のソファアの凹み緑濃し  
神苑に影の寄り添ふ花菖蒲  
サングラスとサングラス会ふ坂の町

森泰一

見てしまふ韓流ドラマ青葉木菟  
大東京青山墓地の新樹かな  
石地蔵の顔それぞれに若葉風  
大原女に案内されをり若葉道